

阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者 達

片桐, 一男 / KATAGIRI, Kazuo

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政史学 / 法政史学

(巻 / Volume)

22

(開始ページ / Start Page)

81

(終了ページ / End Page)

93

(発行年 / Year)

1970-03-20

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00010901>

阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者達

片 桐 一 男

目 次

はしがき

一 天文台勤務

二 馬場塾・三新堂

三 受益の知友・蘭学者

まとめ

は し が き

馬場佐十郎(一七八七—一八二二)は長崎に生をうけ、長じて阿蘭陀通詞となった。彼は伯兄馬場為八郎と志筑忠雄にオランダ語の指導をうけた。さらにオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフにもオランダ語・フランス語の手ほどきを受け、同じく商館長ヤン・コック・ブロムホフとの交情の機を得て英語をも学んだ。のち幕命を帯びて松前に出張した際には露使ゴローニンからロシア語さえも学んだ。

阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者達(片桐)

馬場佐十郎は語学の才に恵まれて、次々に修得した語学力を活かして彼に与えられた公務を果たし、かつ派生的に要求された各種の要請に応えて業績を遺した。これらのことについてはすでに蕪文を草してその勤務と業績を総合的に把握しようと試みた。⁽¹⁾ 本稿においては、馬場が公務の余暇に蘭学塾を経営したこと、および馬場に学恩を受けた人々を追究し、そこから馬場佐十郎が江戸の蘭学界に与えた影響の傾向を探って、彼が蘭学史上にいかなる位置を占めていたかを考えてみたい。

一 天文台勤務

馬場佐十郎の江戸出府についてはドゥーフがその商館日誌の一八〇八年四月三〇日(文化五年四月五日)の条で

小通詞為八郎の息子で稽古通詞の佐十郎が明朝江戸へ向け出發すべく私のもとに別れを告げにきた。

と記している。したがって彼は文化五年の春までは稽古通詞とし

て長崎におり、右の条から四月六日に長崎を出立、二十二歳の若さで幕府の抜擢を受けて江戸の地を踏んだのである。

佐十郎の勤務は当時浅草蔵前片町西裏にあった天文台であった。具体的には前年十二月に開設された地誌御用の局において天文方高橋景保が中心となつて企画中の世界地図の翻譯刊行に協力し、併せて外国関係の文書・書籍の調査を課された模様である。文化六年になる高橋景保の「新鵜飼総界全図」「日本辺海略図」や、同七年の「新訂万国全図」に佐十郎の翻譯協力の成果が顕在している。また六年になる「東北韃靼諸国図誌野作雜記訳説」「帝爵魯西亜国誌」の訳業は魯国文書や書籍の調査・翻譯の成果を示している。

右の世界全図作成は当時の幕府にとって急務の一つであった。文化元年に露国使節レザノフが長崎に来航、翌年幕府の強硬に於てすげない返答に接して退去せしめられて、以来わが北辺に露国船が出現して暴挙を働く事件が頻発した。ここにおいて幕府は右の対処策に加えて欧州諸国の東進に備える必要性を認識し、対外策を考究する資料として、文化四年に「蛮書ヲ以テ地図等仕立可申」旨の指令を参政堀田正敦をして幕儒大学頭林述斎に命じ、これが天文方高橋景保に囑せられたのである。さらに、これが必要性は翌文化五年長崎港に不法侵入のうえ、不穩行為を働いたイギリス軍艦フエートン号事件によつてますます増大したのである。

右の万国全図が完成した翌文化八年の三月一日にはシヨメール翻譯の命が高橋景保にくたり、馬場佐十郎がその任に当たること

となつて、訳文の草案に着手した。次いで同五月高橋景保の建議が実を結び、天文台に「蕃書和解御用」なる翻譯の一局が設けられ、馬場はこの責任ある地位を命ぜられ、かつ加うるに蘭学者大槻玄沢もその訳員にあげられることとなつた。時に玄沢五十五歳。

大槻家の家記に「公義天文方高橋作左衛門殿手に付き阿蘭陀書籍和解の御用相動候様可被_(レ)仰付旨……」とあることにより明白である。と同時に作左衛門から玄沢に左の文が与えられた。

其許義自身手に付き、阿蘭陀書籍和解の御用相動可申。家業の透に御役宅へ相詰、馬場佐十郎手伝可仕候。此段堀根津守殿差図に付申達候。以上³⁾。

とあるところをみるに、玄沢は家塾芝蘭堂の経営を継続しつつ、天文台に勤務して「馬場佐十郎手伝仕る可く」下命されたことがわかる。かつ「平日事無き時は百科全書の反訳」を命ぜられた模様からすれば、基本的業務は外国文書・書籍の取り調べにあつて、その平日事無き時にシヨメールの百科事典の翻譯に従事したことがわかる。

馬場佐十郎はこの後、右の百科事典いわゆる「厚生新編」の訳述に従事する一方、外交問題が各地に起きる度ごとに、その現地に出張を命ぜられ、その応接の重任に当たつた。

文化八年六月ゴローニン監禁事件に際しては松前に出張し、同年五月にも松前に出張した。文政元年五月イギリス船ブラザース号の浦賀来航に際し、また同五年四月にもイギリス船サラセン号が浦賀に来航するが、その度ごとに現地に出張して応接に当たつた。この応接の模様についてはすでに論述した通りである。

二 馬場塾・三新堂

前述のごとく、馬場佐十郎が天文台における責務は外交交渉の事務・文書の取調べと蘭書の翻譯にあつた。なかでも馬場をおいて替るべき人のいない要務は、異国船来航時の応接会話と組織的に正確なオランダ語文法の知識の上になつた翻譯活動であつた。

このため、高橋景保は大槻玄沢に家塾の経営を従来通り継続せしめつつ天文台出勤を命じたのであるが、馬場佐十郎に対しては、天文台における公務の余暇、官邸内においてオランダ語の指導をすすめ、すすんでは塾の経営をもすすめた模様である。

馬場佐十郎が天文台に入った翌文化六年の五月九日付、高橋作左衛門（景保）から間長涯に贈つた書翰を読むと、足立左内に對し先月二十六日に曆学御用につき江戸出府が「申渡」されたことを述べたあと、

（前略）此節小倉金藏・入江八十郎兩人、隔日に不絶罷越稽古致候。尤当人未た字書無之ニ付、某所持之ハルマ出置、訳字入之上承り遣し候。其上不_レ解所へ佐十郎へ持参致候。互ニ稽古ニ相成候。只迷惑なるハ、隔朝早朝より起され候ニハ迷惑致候。（下略）

とみえる。これによれば、この頃小倉金藏と入江八十郎なる兩人が隔日の早朝、多分出勤前に、高橋景保の官邸を訪れて、ハルマの辞書を手掛りに蘭文読解を続けていた模様である。そして訳読できない箇所があると佐十郎へ質問におよんで教えを乞うたことを伝えている。高橋景保は隔朝ごとと早朝から起こされることを

迷惑に思いながらも「互ニ稽古ニ相成候」とその意義を認識し、効果の程をはめかして好意を寄せているのである。

右のことから、馬場佐十郎が高橋景保に對して「世界全図」などの訳読協力を当たるとともに、一方では私的にも種々オランダ語学の面で訳解に協力ないしは教授に当たっていたことが明らかにされる。かつ上司たる高橋景保もこの効果を認めて積極的にこれが援助に当たつた模様であることがわかる。

馬場佐十郎は右のような事情から、オランダ語学の教授をより効果的に進めるべく、著述にも着手したものとと思われる。このことは、馬場が出府した年の秋、早くもものした『蘭語冠履辞考』なる二巻の語学書の凡例において本書の解題をしたあと、

…余其自_レ得_ル所_ヲ以_テコレヲ弁_シ、吾党ノ学者ニ範_シセントス、此編即_チ是也

と明記している。高橋景保や大槻玄沢をはじめ、天文台に出入する江戸の蘭学者連に範を示さんとしたものであつた。さらにこれが対象となる学者の程度については、

幼学先ヅ名物套語及通用諸言ヲ臆記スルコトハ固ヨリ其先務タリ、此編載スル所ノモノハ漸ク其一書ニ就キ一条一篇ノ義理ヲ解サント欲スルノ力ヲ得ル者ノ専用ノコトニメ必ず先每言ノ意義ヲ自得領会スルニ始ルハ其第一要タリ、コレ其徒ノ為ニ示サントスルノ大約ナリ、幼輩コノ学ニ入ル先務ノコトハ階梯ノ読書アリ、故ニコ、ニ略セリ

とあるから、初学者は世間通用の階梯の読書にゆずり、いよいよ文章翻譯に入らんとするいわば本格的蘭学者を対象として著した

ものであったことがわかる。

佐十郎が著したオランダ語学に関する訳著の多くは右に述べたような目的をもってまとめられたものであって、文化七年になる『和蘭辞類訳名鈔』においては、本書が大槻磐水の勸奨もあって、マーリンとハルマの二書をもとに他の諸書をも参勘して訳名を定め、釈義を述べたもので「今コレヲ以テ吾党ノ蒙生ニ範セントス、同学ノ士須クコレヲ熟習諸記シテ其語言ノ本義ト使用ノ機転トヲ失誤スル事ナカレ」と明言している。同様のことは文化八年の『西文規範』においても「我党ノ須知有益」を目的としているのである。

さらに佐十郎が師志筑柳圃の『和蘭詞品考』をもとにしてなった「蘭語九品集」を得て、これを訂正・増減・改写して、文化十一年に『訂正蘭語九品集』をまとめ得たが、これまた「社中ノ諸生徒ニ示ス」目的をもって書いたものであった。そのうちでも特に、後学馬貞由書于司天台下三新堂中

文化十一年甲戌九月

と明記しているところは頗る注目に価する。上司高橋作左衛門景保の理解のもとに天文台官舎において天文台の訳員をはじめ江戸の蘭学者連にオランダ語教授を行っていたものであって、その寓居をば「三新堂」と称して諸生教導の場としていたものと受け取れるのである。すなわち、天文台の蛮書和解御用の公務の余暇、その官舎三新堂塾において蘭学教授を行っていたことを知り得る。佐十郎の著訳になる各種のオランダ語文法書はその塾生に示されたテキストであり、参考文献であったのである。各所

に少数数とはいえ写本の遺っていることによってこの事実を否定することはできない。

なお、同じ文化六年六月三日付の高橋作左衛門から間長涯に宛てられた長文の書翰をみると、その末尾に、

可^レ申上義難^レ尺候へ共、今日ハ会説日ニ而、殊ニ無^レ程左内も相越し、旁多事草々申上候。

ともみえるところから察するに、天文台の日課の一部としてか、あるいは私的な試みかは判然としないけれども、「会説日」というものを定めていたようである。これをもって、にわかには蘭書訳読の会日とは決しがたいが、さりとて完全に無関係の会説日とも受けとりがたい。頗る暗示に富む一句といわなければならぬ。蘭書訳読の定日であったならば当然若き馬場佐十郎がその席における先生格であったことは否定すべくもない。

三 受益の知友・蘭学者

1 高橋景保

高橋景保は通称を作左衛門と称し、父至時が文化元年正月に歿すると、その四月に二十歳で父の職を襲って天文方となった。景保は馬場佐十郎の直接の上司として、馬場佐十郎の江戸召喚から歿年にかけて最も接触が多かった人物であり、馬場の語学力の理解者であると同時に最もよく馬場の語学力の利益を受けた人物でもあった。このことは、すでに述べたごとく万国全図の翻訳補訂の仕事を通じて、あるいはその後の天文台における対外応接事務・文書取調・翻訳事業を通じて知り得るところである。ここで

は従来看過されていた一例をあげて示そう。

馬場が江戸出府の翌文化六年の秋に『東北韃靼諸国図誌野作雜記訳説』六卷六冊と、さらに同七年に『帝爵魯西亞國誌』なる翻譯をなしていることはすでに周知のことである。殊に前者が「己巳ノ孟夏 崎鎮土屋君」の勅奨によって訳述呈上したものであることはその「凡例」の冒頭に明記しているところであるが、なお高橋景保が間重富（長涯）に贈った文化六年五月朔日付の書翰をみると、その一節に次のごとくみえる。

一去春為八郎江曲淵より下げ候韃靼紀事之蘭書松田 二冊、長崎奉行より佐十郎江相下り、蝦夷地之所和解被_レ仰付_二候。祭酒ノ存寄之由、同人義此節甚出精致居候。

これによって明らかなのは次の諸事項であろう。

a 「韃靼紀事之蘭書」二冊は松田某が所蔵する本であったこと。

b 右の二本が去春すなわち文化五年に小通詞格馬場為八郎に長崎奉行曲淵甲斐守景露から下げ渡されたことがあったこと。文化五年の春の為八郎と曲淵甲斐守の行動をみると、文化四年七月に為八郎は大通詞の名村多吉郎とともに露西亜事情調査のため江戸へ召喚されており、翌五年三月には蝦夷地出向を命ぜられ、松前に到り、露人来寇の事後処理をすませて六年の二月に御用済となり、江戸を発して長崎に帰ったのである。一方長崎奉行曲淵甲斐守は文化五年の八月までは江戸に在動していた。よって前記の蘭書は江戸において長崎奉行曲淵甲斐守から馬場為八郎に下げ渡されたわけである。

阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者達（片桐）

c 為八郎が六年二月をもって江戸を発ち長崎に帰ったあと件の蘭書は出府滞在中の佐十郎に下げ渡されたものであって、この際は曲淵甲斐守と交替して江戸に滞在中の長崎奉行土屋紀伊守廉直から下されたことを知り得る。

d 内容的には右の蘭書の「蝦夷地之所」の翻譯を「被_レ仰付_二」たのであって、このことを「祭酒」すなわち大学頭林述斎の「存寄」のことであった。すなわち幕命により馬場佐十郎が翻譯を下命されていたわけで、その間には江戸在府の長崎奉行と天文方の勅奨のうちに進められていたことがわかるのである。それ故に佐十郎も「此節甚出精致」したわけなのであった。

右のことから幕府の意を帯して、この期の天文台とりわけ担当部局たる蕃書和解御用が負わされている責務の内容が明白に伝えられているところである。換言すれば蕃書和解御用の責任者たる高橋作左衛門の責任の一端は馬場佐十郎の翻譯力に負うところが大きかったわけである。この種の話は、やがて次に内命されるローニンの『日本幽囚記』の翻譯においても同様のことであったわけである。

文化九年に馬場佐十郎の訳になる「新巧曆厄日多国星学原訳草」一冊は新巧曆書二巻中のエジプト星学原訳草を抄訳したもので公的翻譯と考えられるが、高橋景保の閲校を得ているのは内容が天文学に属するものであったからであろう。

さらに高橋景保は前記のごとく私的面においても馬場のオランダ語の指導に負うところがあったのである。

2 大槻玄沢

大槻玄沢は杉田玄白・前野良沢に指導を受けて成長した当時の江戸蘭学者中の筆頭とも目される人物であった。彼は文化八年著書和解御用の開局と同時に佐十郎とともにあげられて出勤した。このため同局の事業推進上、佐十郎とは最も密接な関係にあって、年長ではあるが前記のごとく佐十郎の「手伝」ということで翻譯に従事したのである。

すでに蘭学者としての地歩を築き、かつ右の關係から馬場の語学力を適確に評価し得たのは大槻玄沢その人であつて、それ故に従来の江戸蘭学界の最大の欠陥であつた訳説方法を正確な文法に立脚した組織的翻譯に改めるべく佐十郎に教示を乞うたのであつた。

このことを証する文言は大槻・馬場両者それぞれの側に存するが、ここでは一、二の例を挙げておきたい。

まず馬場佐十郎が出府滞在三年めの「文化七年庚午冬望日」にその序を記した『和蘭辭類訳名鈔』を閲するに、馬場佐十郎は柳圃師の遺教をうけつつ、独自にマリーリンとハルマの二辭書について、前者十八類・後者十四類の「分類ノ意味ト其辭類ノ名号トヲ弁認」していたが、このことを玄沢も聞知して一書になすべきことを慫慂したのであつた。すなわち、

貞由近口公事ヲ以テ都下に客在ス、其学ヲ以テ磐水子ト往来スルモノ日々ニ深シ、子一日余ニ謀ルニコノ辭類名称ノ事ヲ以テス、余固ヨリコレヲ訣セントスルノ素志アリ、因テ乃チ公暇ヲ以テ是業ヲ此ニ起シ、両書ニ就テ考究シ、亦他ノ文科

諸書ヲ参勘シ、子ト毎ニ會議討論スルコト數回、殆ソト一年ノ久キニ及ヒ、始テ其訳名ヲ定メ其釈義ヲ述ベ一小冊ヲ為ス、今コレヲ以テ吾党ノ蒙生ニ範セントス、同学ノ士須クコレヲ熟習諳記シテ其語言ノ本義ト使用ノ機転トヲ失誤スル事ナカレ文化七年庚午仲冬望日晴陽和蘭訳生馬場貞由書于江都目天台下之官舎

とある。これによつて次の諸点が判明する。

a 馬場佐十郎の最初の翻譯とされている『蘭語冠履辭考』と『蘭語首尾接詞考』が江戸出府直後の文化五年八月であつて、当然大槻玄沢との交渉もまださほど深まっていな日時のことであるからひとまず措くとすれば、これに次ぐ佐十郎の『和蘭辭類訳名鈔』が注目的となる。はたせるかな、右の一節により、玄沢は馬場佐十郎の出府とともに学問的交渉をもつたことが証せられ、実に本書が玄沢の慫慂によつて起筆されていることがわかるのである。

b 本書のなるまでに「一年ノ久キニ及ビ」と明記しているところから前年の文化六年中に起業されているわけである。さすれば佐十郎が『東北韃靼諸国図誌野作雜記訳説』について『帝爵魯西亜国誌』を訳出すると、それに引き続いて本書に筆をつけたことがわかる。

c 当然ながら右のことから玄沢が天文台出勤以前のこと、おそらく佐十郎の江戸出府とともに学問上の交情を結んだことが証明される。

こんな具合であつたから、やがて大槻玄沢が文化十三年に『蘭訳

梯航」をなすにおよび、

生(馬場)ハ弱齡ヲ以テ精力他ニ超エ、其業益進ミ其精學ヲ纂
フ者多クシテ、從游ノ人日一日ヨリ盛ナリ、皆柳甫ノ遺教ヲ
以テコレニ授ク、是レ即今都下ノ旧法廃シテ新法正式ニ一變
セリ

と馬場佐十郎の功業を特筆評価したのである。

3 杉田恭卿と高須子成

馬場佐十郎が文化十一年になした『和蘭文範摘要』は、佐十郎
の師志筑忠雄が訳した「詞品考」の原典と目される Willem
Sawel (1654—1720) : *Nederwische Sprachkunst*, Amster-
dam, 1708. の大要を訳出したもので「詞品考」や「九品集」
より詳しい。その「和蘭文範摘要引」の一節をみると、

余職事ヲ以テ召シニ応メ都下ニ至リ、在留コ、ニ数年、遂ニ
コノ業ヲ以テ辱ク士班ニ列セリ、コレヨリ以往其数年ノ間、
コノ學ヲ以テ余ニ從游スルモノ亦数人、就中杉田靖ト高須馨
トハ殊ニコノ學ニ篤シテ臆勉專精其業大ニ進ミ、毎ニ余ニ就
テ其要ヲ求ムルヲ功ナリ、故に許メコノ原稿ヲ授ントス云云
と述べ、本文冒頭には

杉田靖恭卿
高須馨子成
蔽里馬場先生詠 門人
と明記されている。

右によつて杉田恭卿・高須子成の兩名はさだめし三新堂塾中の
優等生であつたに相違ない。杉田靖恭卿は杉田玄白の養嗣子であ
る杉田伯元と玄白の娘扇夫婦の間に生まれた長男であつて、実
に玄白の孫に当たる。寛政六年の生まれで、幼名松鶴のち靖、恭卿

阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者達(片桐)

と称し、蘭園と号した。したがつて馬場佐十郎が江戸に出た文化
五年は十五歳の少年であり、本書のなつた文化十一年でもようや
く二十一歳の青年であつた。さすが名門に生を享け好環境に恵ま
れ、馬場の言葉からも進歩の程みるべきものがあつたと解される
が、この文化十一年八月十四日に若い生命を了つたのである。馬
場の「引」は「文化十一年甲戌秋 蔽里識□□」とされているか
ら杉田恭卿死去の直前に記されたものに相違ない。

高須馨子成についても知られるところ少ない。「松齋高須先生
之碑」を手懸りにみても、諱は清馨、字は子成、松齋と号し
た。本姓斎藤氏。秋田の人で藩医稲見升貞に医を学び、長じて江
戸に出、ついで長崎に遊學してオランダ流医学を學ぶ。再び江戸
に戻つて訳官馬場に就いて和蘭語を學んでその大義に通じたとい
う。文化十二年三月二十五日には同志とともに小塚原で刑屍を解
剖した。天保六年五月に秋田藩の表医となり、のち侍医に陞つ
た。明治二年七月二十八日八十二歳をもつて浅草福富町において
死去。高須の姓を冒したのは彼が稲見升貞の養育をうけた縁によ
り稲見氏の姻族高須某の嗣が絶えたためにそれを嗣いだものであ
る。彼には一男四女があつたがその男子が夭したので天保十二年
に備前国の商家光岡万次郎の三男保を養つて嗣とした。これがの
ち弘化三年十月に蜜書和解御用に採用され、嘉永七年に蝦夷地御
用の下命をうけた坪井信道門下の高須松亭その人である。

高須清馨が長崎で檜林榮哲味山のもとで阿蘭外科一流の相伝を
うけたことは「文化八辛未六月二十日」付の「起証文」のあるこ
とによつて証せられ、同じく「文化八辛未晚夏下旬、於崎陽檜林

畠山先生之塾云々の朱筆註記を有する写本「外科宗伝」のあることによつても勉学のほどが察せられる。

高須松齋が馬場佐十郎に師事したことは碑文をはじめ、前記文化十一年秋の筆になる『和蘭文範摘要引』によつても証せられるが、「文化九年壬申秋殿里誌」と明記した「凡例」をもつ写本『度量考』の巻頭には「殿里先生口授 高清算謹識」と記されており、ローマ字で Takas とある丸印に「松齋」の角印二顆を有している点によつても修学の模様を窺うことができる。

また京都大学言語学研究室蔵の『蘭学梯航』には「松齋追補」を有し、早稲田大学図書館には高須松齋旧蔵のハルマの辞書が現存していることなどは碑文に「就 訳官馬場某、学 和蘭語、略通 其大義」の一句によく対応する史料と考えられる。

4 宇田川玄真・榕庵父子

文化八年天文台において開始された『厚生新編』訳述事業に従事したスタッフ馬場佐十郎・大槻玄沢に次いで加えられたのは宇田川玄真である。現に稿本の第四冊以降第五十九冊までで宇田川玄真が訳校に従事した旨明記してある。初期の頃は馬場佐十郎・大槻玄沢・宇田川玄真と三者の名が併記されていて、協力の様子を窺い知ることができる。

西京商業高等学校所蔵の宇田川玄真作「檢籙韻府」写本一冊見返しに左の記述がある。

此書也宇田川玄真氏先從馬場先生遊日抄古言出而為之國諺其疑者質馬場子而正之漸以為全書名韻府蘭學者置之左右足助訳書取M: 書此本を著には宇田川氏も馬場先生従ひ時に又暇日

酒肴を携墨水へ扁舟を泛べなどして力を尽して著されり狼人に借して写さしめずさて足なくして千里を走ると云べし彼宇田川氏にて□□秘して人□□今以借さず榕庵□ぞう父□□ぬ□□と思はるのみ m: するす

右によつて本書が明らかに宇田川玄真の編著になり、かつ馬場佐十郎の教導を得つゝ成立したものであることが判明する。内容は蘭日辞書である。馬場の天文台入りが文化五年で玄真が天文台に勤務したのが文化十年（一八一三）四月であるから、この頃から馬場の歿した文政五年（一八二二）七月までの約十年間に本書が成立したと考えられる公算が大きい。しかし本書の本文第一丁綴じめの下方に「采真居図書印」の朱印、裏見返しに「采真居」と墨書があり、同様の蔵書印ならびに「江戸大伝馬町二丁目 采真宮本周安篤蔵本」「文化十一年甲戌春二月」などとある蘭文写本のあるところから、もし本書がM:すなわち宮本周安篤の筆写蔵本と解せられるならば、本書の起業は大作の辞書であるだけに文化十年よりも逆のぼり得るとも考えられる。馬場は文化五年出府後、前述もした通り、間もなく天文台出入りの蘭学者を中心にその他の縁故による江戸の蘭学者にもオランダ語の教授に当たっていたから、右のことは不可能事ではなかつたのである。

いざれにしても、宇田川玄真は生来の資質に加えて、馬場から組織的なオランダ語を学んだからその実力は大きいに高上し、それ故に天文台に入ってから大槻玄沢とともに『厚生新編』翻譯の中心的存在になり得たのである。

こんな関係から宇田川玄真は養嗣子榕庵を佐十郎に師事せしめ

るべく依頼したのであった。

「宇田川榕庵自叙年譜」をみると文化十一年甲戌、年十七の項に、

先人(玄真)(中略)令予就_レ蝦里馬場翁_ニ受_レ訳文之法。と
みえ、翌十二年乙亥、年十八の項には

往来馬場塾、就_レ局方・草木譜等書、蝦里柳圃先生之弟子、
善通_ニ西洋文法_一、又解_ニ魯西語_一、(下略)

ともみえる。のち日本の化学界に貢献する宇田川玄真の薦めにより馬場佐十郎の塾に通って「訳文之法」を学んだという。その際のテキストが「局方」や「草木譜」などの書であったと記している。宇田川榕庵に相応したテキストというべきである。この基礎学習のうえに宇田川榕庵は順次翻譯をなし、業績をあげていったのである。

5 奥平昌高・神谷弘孝・大江春塘主従

奥平昌高は幼名を友之進といい、薩摩藩主島津重豪の第二子で、天明六年に中津藩奥平昌男の養子となり、家督をついだ。

昌高は頗る多趣味で交友も広く、殊にその蘭癖ぶりは実父ゆずりの年季の入ったものであった。すでに一八一〇年蘭館長ドウィフからフレデリック・ヘンドリック Frederik Hendrik なる蘭名をもらって面談の機会を重ねていた。

この中津侯の蘭癖ぶりが、どうして単なる殿様芸でなく本格的な勉学ぶりであったという証拠に、従来よく『蘭語訳撰』があげられることが多かった。しかしその侯の知識の源泉が奈辺にあったかを追及するという点においては頗るあいまいなままに打ち過

ぎされてきた。昌高の蘭癖ぶりが本格的で、かなり高度な域にまで達していたとみることについては異存のないところである。しかし『蘭語訳撰』が単に昌高の「撰」とか「著」になるものとか、あるいは「編纂」とかいわれている点については少しく立入って考察してみる必要がある。

いわゆる『蘭語訳撰』なる書名は、その凡例において「題メ蘭語訳撰トイフ」とあるところから採られたもので、正規の表紙には、

Nieuw Verzameld Japans en Hollandsch Woordenboek
Door den Vorst van het Landschap Nakats Minamoto
Masataka I Deel, gebruikt bij zijn dienaar Kamija Filo-
josi. 1810.

とあるものである。これを訳出せば、

中津藩主源昌高による新編日蘭辞書 一編 家臣神谷弘孝に
よる出版 一八一〇年

となる。本辞書に榮亭(昌高)の文化庚午仲秋年(七年一八一〇)の凡例がつき、馬場貞由がオランダ文の序文を寄せている。本文の内容はイロハ分にして、さらにその各項目内を十九門に分っている。

ところで、すでに学界にその存在を報じ、かつその内容の一端をも紹介しように

Hollandsch en Japansch Woordenboek (西語訳撰)
Vertaalen door Ba: Zazuro
二二四頁、森田千庵自筆写本、一冊⁽²³⁾

なるものがある。内容は集載の各語をイロハ分にし、さらにその各項目内を十六門に分類している。かつ本書のタイトルページには *Verhalen door Bai Zarruo* とあって、「馬場佐十郎による翻訳」なることが明記されている。

右の『蘭語訳撰』と『西語訳撰』は極めて類似の構成になっており、その第一項である「伊」項の「天文」部を例にあげて両者が同一内容であることを論証し、両者の全般に亘る比較検討は後日にゆずっておいた。拙論発表後、鈴木博士の詳細な『蘭語訳撰』と『西語訳撰』の比較検討の成果に接し得た。国語学の立場から『蘭語訳撰』を複製され、関係諸本を検討されたのであるが、蘭学史の分野においても豊富な史料を得たわけで、今後この分野における活用が望まれる。なお両本における異同のみられる項目に手懸りに、どちらが前で、どちらが後の本であるかという考証も進められているが、本文各語の範囲内からだけでは結論的判定はむづかしいようである。今後傍証資料と史料の吟味が加えられるべきことかと思われる。

しかし現段階ではやはり馬場が中津侯の『蘭語訳撰』に寄せた蘭語序文に「それまで私が暗記していたところのオランダ語を挙げて悉く侯の家臣神谷弘孝に書き写させたのである」という一節を尊重しなければならぬ。かつ「暗記していたところ」を口述伝授したのではなく、すでに馬場が記憶して纏めておいた日蘭語彙集（『西語訳撰』とも思われる）をば「神谷弘孝に書き写す」ことを許したことだけは認めなければならぬ。すなわち、今後の考証により『蘭語訳撰』と『西語訳撰』両本における写本の前

後関係・内容の異同が多少動いたとしても、その内容の大部分は馬場佐十郎の作業を引き継いでいると見做さないわけにはいかない。

右により奥平昌高の蘭癖ぶりが本格的であるといわれる内実は、馬場佐十郎から受けた影響が殊の外大きな部分を占めていたということに気付かざるを得ない。

カミヤヒロヨシについては一八一〇年刊『蘭語訳撰』のタイトルページに *Zijn dienaar kamija Filiojosi* とみえ、それによせた馬場の序文にも *Zijn Edele dienaar kamia Filiojosi* とみえており、のち文政五年昌高侯自身も『バスタード辞書』の序において同じ志の家臣の一人として *Kamija Filiojosi* と記している人物である。

ドウーフの日本回想録によると、一八一〇年江戸参府の折「其の（中津侯の）藩士の一人は予よりピーテル・ファン・デル・ストルプ *Pieter van der Stolp* の名を授けられたり」と明記され、このストルプなる蘭名をもらった中津藩士について呉秀三博士は神谷源内だとされている。その理由を左のように説明されている。

京都帝国大学図書館の所蔵にて新村博士より貸与へられたる *Bijdragen tot de Taal- Land- en Volkskunde van N.I. Viende Volgreeds, Zesde Deel, 's Naamlijst van Japanners* にジーンが一八〇六年に *Camija Ginnai* に *Pieter van der Stolp* と命名せること書付たり。神谷家に現に蔵する奥平昌高侯の書状によりても神谷源内が *v. d. Stolp* なる

こと疑なし。(中略)然るに神谷氏の系図によれば神谷源内の名乗は弘孝なり。弘孝をヒロヨシと訓むか。¹⁶⁾右に信を置くとすれば、

Camija Ginnai—神谷源内—Pieter van der Stolp—神谷弘孝—Kamia Filojosi

という結論を得る。

神谷弘孝が君侯昌高と同様、なかなかの蘭癖であったらしいことは以上で察しがつくが、なお馬場が『蘭語訳撰』の序において、自分の暗記していたオランダ語を「悉く侯の家臣神谷弘孝に書き写させた」といっているところや、『バスタード辞書』の序文において昌高侯が神谷弘孝が『蘭語訳撰』の Ooije Zuntoo 大江春塘が『バスタード辞書』の印刷に従事したことを述べ、特に「本書は B. Sadaïosi 氏によって完全に校訂された」と明記しているところを見ると、神谷弘孝と大江春塘の両名も右の作業を通じて馬場より語学的教導を受けたであろうと、多分に考えられるところである。

6 藤井方亭と藤林普山

馬場佐十郎が文化十二年に京都の蘭学者藤林普山の『和蘭語法解』に寄せた序文には注目すべき記事がある。まず馬場の恩師である柳圃(志筑忠雄)先生の弟子が三人しかいないこと。その三人が J. Rokairo (吉雄六次郎—権之助)と N. Kriesmon (西吉右衛門)と自分であること。西はすでに死んだが、自分は江戸の幕府へ呼ばれた。そして「江戸の同学者に(中略)柳圃の法則を教授した。その人達の中で Woedagawa (宇田川)と Feozii

(藤井)とが主で、これをよく理解した。」と記している。この Woedagawa は前述のことからして宇田川玄真とも榕庵ともされる。両者と解しても差支ない。Feozii は宇田川榛齋の訳業を援けた藤井方亭その人かと思われる。その詳伝は明らかでないが、宇田川の『内科撰要』を増補編述するに尽力し、『遠西医方名物考』においてもその語学力をもって助成したといわれ、宇田川塾で翻譯力の最も備わった一人と称されたのは、多分に馬場の言に符合していると解せられる。

馬場が『和蘭語法解』に寄せた蘭語序文にはさらに「Miaoco 居住の F. Taisky 先生は、我々の法則の弟子の一人で、性勤勉にして文法の翻譯に尽力している。」とみえる。藤林普山は海上随鷗(稻村三伯)が京都移住後師事し、師随鷗の『ハルマ和解』八万言を簡便にして三万語収録の『訳鍵』を作り、大いに斯界の利用を得た。この普山の門人山崎玄東は普山が「曾与」江戸榛齋宇田川翁(結義為兄弟¹⁷⁾)と記し、榛齋と義兄弟の誼を結んだと伝えている。随鷗死歿の文化八年正月以後、少なくとも『和蘭語法解』の各序文が出来た文化九年頃にかけて江戸遊学の機を得て右のような約を結んだものと推量される。したがって大槻如電翁が「新撰洋学年表」において、普山の『和蘭語法解』が百乙東の語典に拠っているところから、普山が随鷗の歿後江戸に出て榛齋に従遊し、馬場殿里や大槻磐水・磐里父子にも就いて諸説を聴取し、殊に百氏語典は殿里より割愛されたものであると推測された点も一概には捨てきれない。

辞書・蘭文法で名をあげた藤林普山であるだけに、馬場が「我

々の法則の弟子の一人」という言に耳を貸さねばならないと思われる。

ま と め

長崎の阿蘭陀稽古通詞出身の馬場佐十郎が江戸幕府に召し抱えられて、その力量を発揮した期間は文化五年（一八〇八）から病歿の文政五年（一八二二）までのわずか十五年間であった。

この間における彼の活躍と業績は、前稿ならびに本稿において論述したが、その要はおよそ次の諸点となる。

一、彼に課せられた最大の責務は天文台中の蕃書和解御用の局において外交文書の調査・翻譯と、それに有用な書籍の調査・翻譯にあり、併せて異国船来航の現地に臨んでその通弁・応接の任に当たることであった。二、彼の訳業の分野は諸般の要請に応じて、語学の諸分野、世界地理・歴史に関する分野・自然科学に関する分野の多岐に亘っている。三、かつその訳業の多くは公儀（具体的には幕府参政―大学頭もしくは長崎奉行―天文方）の命をうけて天文台の翻譯事業の一環として行なわれた。四、また彼は上司たる天文方を援け、訳員たちをよくリードして事業の推進に当たった。五、さらに進んで、彼は公務の余暇、上司たる天文方高橋景保の理解のもとに天文台内の官舎を三新堂塾と名付けて天文台訳員をはじめ江戸の蘭学者の有志に、文法に立脚したオランダ語学を教授した。六、かつそれら知友・門下生の要望に応えて訳司・蘭学社中にとって有用なる語学書、とりわけ単語集・会話書・文法書を精力的に訳述し続けた。

右の馬場佐十郎の活躍期は江戸幕府の天文台に蕃書和解御用の局が新設された当初に当たっており、蕃書和解御用の実態を示す史料皆無といっても過言でない今日において、彼の翻譯業績の内容と方向性は頗る注目し値すると思われる。一方、江戸の蘭学界においては、初期の蘭学者が老齢に達し、次代の俊秀が一家をなす転換期に当たり、かつ北辺の急務が上下に広く叫ばれる時期に当たって、蘭学者の力量がようやく認識され、その地位向上の機に遭遇していたから、人材は数を要求されることとなった。ここにおいて馬場の組織的語学指導は頗る重要視されることとなった。したがってドウーフより「此の頗る俊秀なる青年」⁽¹⁸⁾と評された馬場佐十郎は斯界の長老杉田玄白から「わが子弟孫子、その教へを受くることなれば、各々その真法を得て、正訳も成就すべし」と最大級の期待を受け、やがて、斯界の最高峰たる大槻玄沢をして「都下ノ旧法廃シテ新法正式ニ一変」⁽²⁰⁾するといわしめる実効を挙げ得たのである。しかし、これらのことが彼に極度の過勞を強いる結果となつて、春秋に富む身を短めたものと解される。

なお馬場佐十郎をめぐる零細な関係資料を追い求めれば、まだ幾人かの門弟を見つけ出すことができよう。また本稿では触れ得なかつたが、間接的に馬場佐十郎より影響を受けた人々や彼自身の私的な身近事情などについては改めて筆を執りたいと思う。

註

- (1) 片桐一男「幕末における異国船応接と阿蘭陀通詞馬場佐十郎」海史研究 第十号（昭和四十三年四月）。

片桐「阿蘭陀通詞馬場佐十郎の天文台勤務とその業績」

法政史学 第二十一号（昭和四十四年三月）。

- (2) 大槻如電氏『大槻磐水』明治三十五年。
- (3) 同上。
- (4) 上原久・小野文雄氏「高橋景保の書簡について」埼玉大学紀要 第十七卷一九六八年度（昭和四十四年三月）。
- (5) 馬場佐十郎『訂正蘭語九品集』日本学士院所蔵「川本幸民関係資料」。
- (6) 上原・小野（4）。
- (7) 上原・小野（4）。
- (8) 関場不二彦氏『西医学東漸史話』下巻 昭和八年一月。
- (9) 関場不二彦氏『西医学東漸史話余譚』昭和八年。
- (10) 長崎県立図書館所蔵。
- (11) 京都市立西京商業高等学校図書館編刊『洋学関係資料解題Ⅰ』昭和四十二年三月。
- (12) 岡村千曳氏『紅毛文化史話』昭和二十八年六月。
- (13) 片桐（1）。
- (14) 片桐（1）。
- (15) 鈴木博氏解題編『蘭語訳撰』昭和四十三年十二月。
- (16) 呉秀三氏『シーボルト江戸参府紀行』。
- (17) 藤林泰助『西医今方』に寄せた山崎玄東の序。
- (18) 呉秀三氏訳（16）。
- (19) 杉田玄白『蘭学事始』。
- (20) 大槻玄沢『蘭訳梯航』。

附 記

小論脱稿後、受益の門弟を一人見落していたことに気付いた。左にその事実を附記するとどめたい。

文化十二年（一八一五）に出版された杉田立卿の『眼科新書』をみると、玄白の養嗣子にして立卿の義兄に当たる杉田紫石（伯元）が親しく「序」を寄せておよそ左のような意味のことをいっている。

一日大槻磐水を訪れて、そこで蘭書をみた。それを持ち帰って家翁（玄白）にみせたところ、家翁は喜んでこれを購入し、宇田川榛齋に翻譯をすすめたが、多事によりできず、のち家弟（立卿）に訳訂を任せしたが、すでに数年を経ってしまったのにその成稿の報に接しない。その訳は「粗脱訳事」を恐れてのことであった。しかるに近頃、訳官馬場鞆里が官命を奉じて都下に在るのをさいわい、これに周旋し、就いて重訳せしめ、始めて「其条理悉貫」するを得た、とある。してみると杉田立卿がブレンクの眼科書を訳述したのは、実に馬場佐十郎に師事し得たことによるわけである。これも、玄白が「わが子弟孫子、その教へを受……正訳も成就すべし」の一句に対応し、その言の正しきを傍証するに足ると思われる。（二・八記）。

一九六九・一一・二五稿

（文部省専門職員）

阿蘭陀通詞馬場佐十郎に受益の江戸の蘭学者達（片桐）